

私は朗読をライフワークとして楽しんでいる。仕事としては高校の国語の教員として四十年勤めたが、いつも声のことばに関心があった。これは、小学生の時のアナウンサーへの憧れが大きいと思う。

小学生の時に印象の強かったアナウンサーは、小川宏さんだ。笑顔と姿勢、そして駄洒落である。そして何よりインタビューが上手かった。「消しゴムが利かないのがアナウンサー」とおっしゃっていた。二〇一六年に亡くなられた。卒寿。昭和の名アナウンサーの一人といえる。小川さんだけでなく、山川静夫さんも古典芸能に造詣が深く、惹きつけられた。こんなことが根っことなって、声のことばの表現を追求する生き方をしてきた。

そして、松山に行った二〇一二年、ひょんなことで八木会長に萬翠荘で声をかけていただき、滑稽俳句協会の会員となった。さらに「あなたの朗読にきっと生きる。虎造節をやりましょう」と虎造節保存会にも誘っていただき、「お願いします」と即答したのが二〇二二年の秋だった。八木会長は「息をたっぷり吸って。間を大切に。聴衆に耳を傾けて。」と繰り返される。昨年の春、虎造節全国大会で第三位をいただいた。浪曲は「一、声 二、節 三、啖呵」と言うそう。虎造節を学んで、自分の朗読が緩急メリハリのある表現へと変わってきたと思う。

今年は日本で放送が始まって百年。「アナウンサー」との出逢いに私は生かされている。只々感謝しかない。